

橈骨動脈血管造影検査を開始している。実際に当施設で行っている方法について若干の文献的考察を加えて報告する。

10 肝内病変の評価について PET が有効であった 1 例

小林 由夏・飯利 孝雄・大嶋 智子
横田 隆司・七條 公利

立川総合病院消化器内科

症例は 70 才，男性。胃角小弯に 2 型胃癌を認め，腹部 CT 上，肝門部門脈内に欠損像が見られた。長時間の安静仰臥位が困難で，他の検査による病変の血栓か腫瘍塞栓かの評価は不可能であった。病変の鑑別の目的に F-18 標識フルオロデオキシグルコース (FDG) を投与して体内の糖代謝を画像化するポジトロンエミッショントモグラフィ (PET) を行ったところ，同部位に高集積を認め，腫瘍塞栓であることが判明した。悪性腫瘍では正常組織に比較して糖代謝が亢進していることが知られており，FDG-PET は，肝臓および局所の病変の良，悪性の鑑別，手術前の病変の staging，腫瘍マーカーの上昇があるときの Screening について有用と考えられる。肝転移病変の評価においては，造影 CT に比して sensitivity, accuracy とともに高いという報告もある。今後臨床の場で，PET が機能的画像として活用されると思われる。

11 塩酸チクロピジンによる肝障害 — 薬剤師の視点から —

継田 雅美・畑 耕治郎*・五十嵐健太郎*
古川 浩一*・堺 勝之**・小田 弘隆**
新潟市民病院薬剤部
同 消化器科*
同 循環器科**

当院で最近経験した塩酸チクロピジンによる薬物性肝障害の 3 例を報告した。抗血小板剤である塩酸チクロピジンは一専門診療科が処方する特殊薬剤ではなく多数の診療科が処方する普及薬剤で

あり，過去再三の緊急安全性情報が出されているにもかかわらず重大な副作用が頻発している。副作用の発現部位 (造血器・肝臓) と時期 (約 2 ヶ月) がほぼ特定されているため，処方前に血算・肝機能をチェックし処方後 2 ヶ月は最低 2 週に 1 度の血液検査を行なうのは周知のごとくであるが，この検査体制でも副作用の早期発見には不十分な例がみられた。塩酸チクロピジンの副作用による肝障害は一旦発症すると重症・遷延化する例があるため，異常値が出現した場合グレード 1 であっても中止を検討する必要がある。塩酸チクロピジン投与に際しては厳密な処方適応および投与期間の可及的短縮化を考慮すべきであるとともに病診連携が推進される状況下から，紹介先へも塩酸チクロピジンにおける情報とコメントを提供すべきである。

12 B 型肝炎に対する lamivudine 治療 — QOL 改善例を中心に —

畑 耕治郎・渡辺 和彦・阿部 行宏
相場 恒男・五十嵐健太郎・古川 浩一
何 汝朝・月岡 恵

新潟市民病院消化器科

Lamivudine 治療を 1 年以上継続した B 型肝炎変 7 例 (うち 1 例は非代償性) について臨床経過を検討した。検査値を治療前と 12 か月後で比較すると，ALT, アルブミン, 血小板数, AFP では有意差は認めなかったが，コリンエステラーゼ値は有意に上昇した。HBV-DNA (TMA 法) は 5 例が検出感度以下となり，1 例が低下し，1 例が YIDD 変異により再上昇した。HBe 抗原/抗体のセロコンバージョンは 1 例 (18 か月後) に認められた。

肝機能の flare up は治療終了例 5 例中 2 例 (1 例は YIDD) と継続例 2 例中 1 例 (YIDD) に認められたが，重症化には至らなかった。また 1 例において，肝外合併症である慢性腎炎によるネフローゼ症候群が改善し浮腫が消失した。非代償性の 1 例において，肝性脳症・胸水・腹水が改善し，PS の改善，栄養状態の改善，通院回数の減少など

QOL改善に寄与した。肝硬変では肝予備能の改善および肝不全移行の遅延化が期待される。

13 インターフェロン，リバビリン併用療法によって譫妄状態に陥ったC型慢性肝炎の一例

青木 洋平・丸山 正樹・大越 章吾

鈴木 健司・野本 実・青柳 豊

新潟大学大学院医歯学総合研究科
分子細胞学消化器内科学分野(第三内科)

症例は58歳女性。C型慢性肝炎に対し、IFNおよびRibavirinの併用療法を行った。経過中IFNの副作用としてせん妄が出現し、IFNおよびRibavirinの投与を中止したが、せん妄、幻覚妄想などの精神症状は遷延した。これらの精神症状は、抗精神病薬の投与にて改善された。一方、C型慢性肝炎に対しては、HCV-RNAは持続陰性となり著効となった。

IFNの副作用として、うつ病や不安焦燥感、せん妄などの精神症状が報告されているが、IFN低用量投与(慢性肝炎に対する投与)においては、これらの精神症状が遷延することがしばしばある。これは、IFNの直接作用ではなく、IL-1やTNFなどの神経毒性を持つサイトカインを介した作用によるものと考えられている。よって、精神的脆弱性のあるPatientに対しIFNを投与する際は、投与中および投与後も注意深く経過観察をする必要がある。

14 インターフェロン治療が有効であったC型肝炎関連腎症と思われる一例

目時 亮・横田 隆司・大嶋 智子

藤原 真一・小林 由夏・飯利 孝雄

七條 公利

立川総合病院消化器内科

C型肝炎患者に膜性増殖性腎炎が起こることが知られており、HCV関連腎症といわれている。今回我々はC型慢性肝炎にネフローゼ症候群を合併しIFN投与に伴い尿蛋白が減少した一例を経

験した。症例は、58歳女性。約30年前よりHCV抗体陽性を指摘。3年前より尿潜血と尿蛋白陽性を指摘され、2年前から徐々にトランスアミナーゼの上昇を認めたためIFN治療目的にて入院となった。入院時検査成績として、TP・Albの低下と、GOT 243, GPT 276と肝酵素の上昇を認めた。また、HCV抗体が陽性でウイルス量、470KIU、ジェノタイプIIaであった。尿蛋白は一日量で5.1gであった。その他に、クリオグロブリン擬陽性と、補体価の低下を認めたためHCV関連腎症と診断し、IFN投与を開始した。IFN投与開始後よりトランスアミナーゼの改善と、尿蛋白の減少を認めた。IFN開始2週間後にはHCV-RNAは陰性化し退院となった。

C型慢性肝炎とHCV関連腎症の治療としてIFN治療が有効であった一例を経験した。HCV関連腎症の症例の蓄積により、腎機能の長期的予後も考慮した総合的治療が必要と考えられた。

15 IFN・Ribavirin併用療法の経験

杉山 幹也・丸山 貴広・近 幸吉

新潟県立坂町病院内科

C型慢性肝炎に対して若干例のIFN・Ribavirin併用療法を施行したので報告する。

17例に施行(投与完結8, 継続中4例, 中止5例)。Serogroup 1(以下1群)は15例, 2(以下2群)は2例。1群中HCVRNAの24週終了時陰性化率は71.4%(7例中5例)であった。

1群中完結し得た7例中3例(2例は8週でRNA陰性化, 1例は12週で陰性化)は引き続きアドバフェロンの間歇投与を8~9ヶ月継続し、RNA陰性を持続中であり、他の4例中2例は終了時にRNA陽性、別の2例は16週で陰性化した。終了後4週でRNAは再陽性化した。中止した5例の主な理由は鬱状態、高度の倦怠感、全身性皮疹であった。

貧血は全例に生じたが、そのみで治療を中止した例はなく、治療終了後速やかに前値に復した。2群は2例ともに開始4週でRNAが陰性化し以降も持続陰性である。